

# 未来へのつなぐ

Education for Sustainable Development Coordinator Project

## ESDコーディネーター・プロジェクト 2012-2014 活動報告書



認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議



# 持続可能な社会へ、垣根を超えてつながろう！

## ー 3 年間の ESD コーディネーター・プロジェクトのまとめー

---

### ローカルに、垣根を超えて

グローバルに人、モノ、情報が行き交い、一見世界はボーダレスになっているかのように見えます。しかし、戦争、格差、貧困、教育を受けられないなどの矛盾はますます先鋭化しています。その原因の大きな一つが、足下での人と人のつながりの不足です。そのためにさまざまな地域課題を解決することが遠くなってしまっているのです。持続可能な社会は足下から、地域、コミュニティから始まります。テーマや立場を超えて人びとがつながるためには、学びあいによって人と人を「つなぐ人」、ESD コーディネーターが必要です。

地域には、市民参加のコーディネーター、ボランティアコーディネーター、社会教育主事、教育支援コーディネーター、まちづくりコーディネーター、地域おこし協力隊など、さまざまな「つなぐ人」が活躍しています。これらの「つなぐ人」が ESD という視点や手法を共有すること、さらに仕事にしていなくとも、社会の課題に取り組んでいる方々が多様な主体と連携していくための力を強化することによって、その必要に応えていくことができます。

### コーディネート力は現場で育つ

コーディネート力は、座学だけでは育ちません。研修には、持続可能な地域づくり、あるいはそのための市民、行政、企業、大学などの地域の異なる立場の人びとの協働を現場でコーディネートする OJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）を組み込むことが重要なポイントとなります。

ESD-J はこの 3 年間の“ESD コーディネーター・プロジェクト”の中で、4 つの地域の協力を得て、コーディネーター的な立場にある行政、公民館職員や NPO スタッフ、市民、地域の事業者などを対象に「ESD コーディネーター研修」を実施して、そのすすめ方や効果などを検証しました。その中から整理され、生まれてきたのが「ESD コーディネーター研修で扱う要素」と映像教材です。

ESD コーディネーター研修では、すでに地域で活動している既存のコーディネーターが ESD の視点を共有することと、地域の課題を見つけ出し、解決の糸口をつくる方法をしっかり学ぶことを大事にしています。

### 地域のニーズ、実情に合わせて人を育てよう

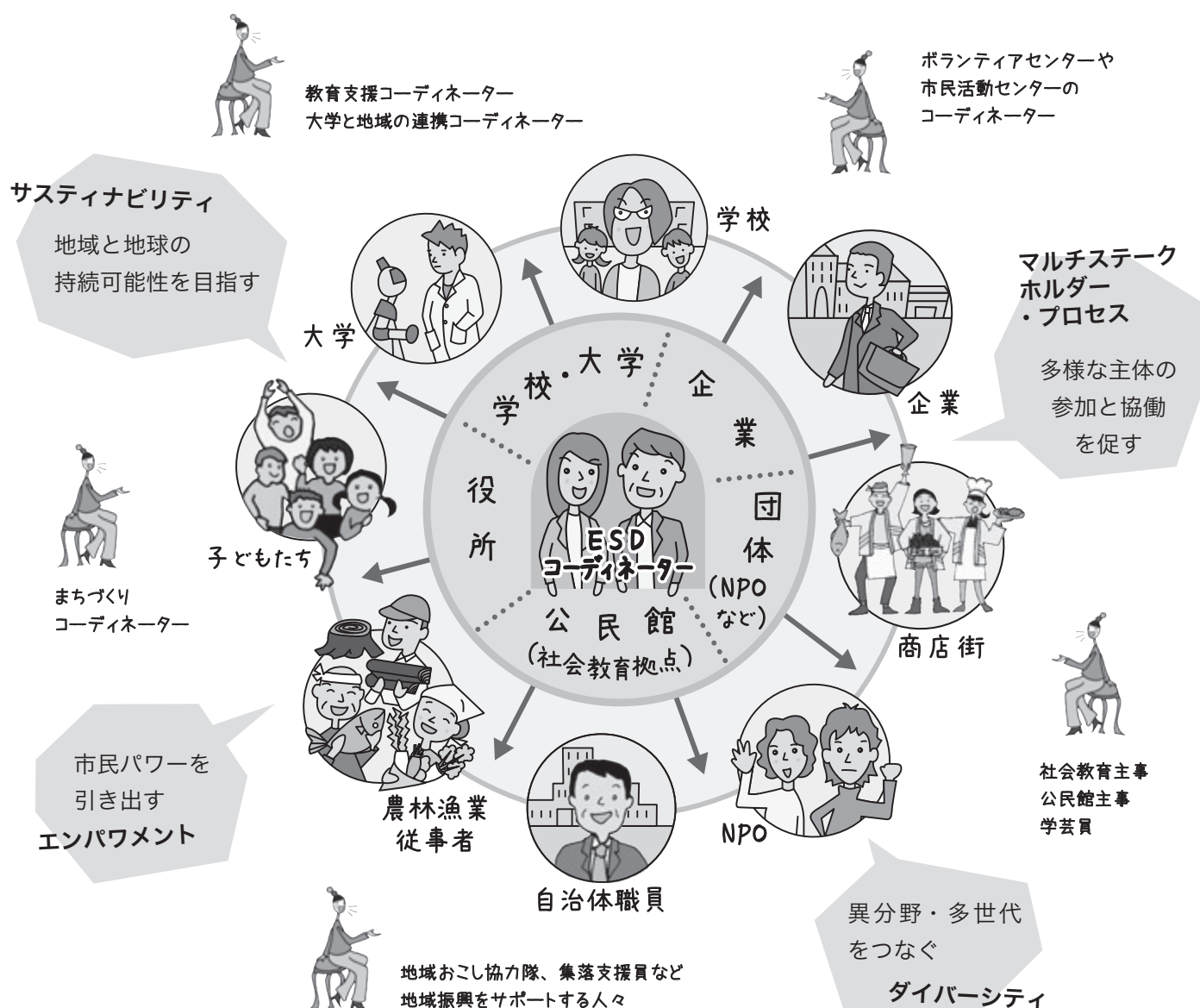
2014 年で「ESD の 10 年」が終了し、新たな ESD の取り組みが始まりました。その方向性を示すユネスコのグローバル・アクション・プログラム（GAP）は、コミュニティをベースにさまざまな主体が協働して、行政の支援のもと包括的な取り組みを進めていくよう求めています。ESD の視点と方法を身につけたコーディネーターの重要性がますます浮かび上がっています。

それぞれの地域の実情に応じて、地域課題の発見、分析、解決のプロセスを持続可能な地域づくりに発展させ、地域のさまざまな主体を「つなぐ人」を育てていきましょう！

# 目 次

はじめに	1
目次	2
1. 「ESD コーディネーター研修」をひらこう！	3
・ ESD コーディネータープロジェクトとは	4
・ ESD コーディネーターに必要な7つの視点	4
・ 学びと実践を組み合わせ、OJT 型研修	5
・ 地域のニーズ、実情に合わせて人を育てよう	5
・ ESD コーディネーター研修で扱う要素	6
・ 映像教材を活用しよう	8
2. OJT 型研修モデル実施レポート～研修デザインの参考に～	11
①北九州：持続可能なまちづくりの鍵となる ESD コーディネーターを育む 「ESD 未来創造セミナー」及び「修了生サポート研修」	12
②広 島：地域コーディネータースクール「地域とテーマの幸せな出会い」	14
③岡 山：地域のみかた～公民館職員のエンパワメントによる地域力向上～	16
④茨 城：共創空間をコーディネートする人材と ESD センターをつくる	18
ESD コーディネータープロジェクト関係者一覧	20
3. ESD コーディネーター研修 2014 実施レポート	21
概要とプログラム	22
1 日目：ガイダンス～フィールドワーク	24
ヒアリングレポート	26
2 日目：問題点の整理～課題の抽出～提案作成	27
3 日目：提案発表	28
意図開き～研修を計画しよう	29
参加者の声	30
今後に向けて	31

# 1. 人びとの思いを形にし、未来へつなぐ 「ESD コーディネーター研修」 をひらこう！



- 「つなぐ人」たちに ESD の視点と方法をプラスする
- 社会活動のリーダーの「思いを形にし、未来へつなぐ」力をアップする

# 思いを形にし 未来へつなぐ人

地域のなかで、様々な人たちがかわり、地域や社会の課題を学びあい、それを解決するための行動を起こしていく場を生み出す。そうすることで、持続可能ですべての人が排除されずに生きられる地域社会をつくることにつなげていく。そんな学びの場を、私たちはESDと呼んでいます。大人も子どもも、テーマや立場を超えて人びとがつながるためには、学びあいによって人と人を「つなぐ人」、ESDコーディネーターが必要です。

## ESD コーディネータープロジェクトとは

ESD-Jは、2009～10年にかけて、環境省からの受託事業として「ESDコーディネーター育成のあり方に関する検討会」を開催しました。そこでは、ESDコーディネーターの概念整理をし、地域ですでに活躍しているさまざまな立場のコーディネーターにESDの視点を共有化・意識化していただくアプローチが重要、という方向性を打ち出し、育成方法として組込み型、OJT型の研修モデルを開発しました。

ESDコーディネーター・プロジェクトでは、その成果を基盤としつつ、コーディネーター育成をより具体化し、事業化していくことを目指して、2012～14年の3年間、OJT型研修のモデル実施<sup>\*1</sup>し、コーディネーター研修が扱う要素<sup>\*2</sup>の整理と、映像教材作成<sup>\*3</sup>に取り組んできました。

\*1 OJT研修のモデル実施にあたっては、以下の団体にご協力をいただきました。（各地の研修内容⇒p10-17）

北九州市、北九州サステナビリティ研究所、環境教育事務所 Leaf、岡山市、茨城 NPO センター・コモンズ

\*2 ESDコーディネーター研修が扱う要素（⇒p6-7）

\*3 映像教材（⇒p8-9）

## ESD コーディネーターに必要な7つの視点

環境省「ESDコーディネーター育成あり方検討会」が2010年にとりまとめた7つの視点は以下の通りです。

- 1 地域の持続可能性、世界の持続可能性を視野に入れたビジョンを持っている
- 2 地域の課題に取り組む一員としての自覚を持っている
- 3 市民のエンパワメントを促進する
- 4 多様な主体（教育現場を含む）の参加と協働を促す
- 5 多様な課題を把握し、分野横断的な活動を促す
- 6 さまざまな主体が社会的責任を果たせるよう働きかける
- 7 持続可能な社会にむけたビジョンの実現に向けた道筋を示し、それをプロデュース、マネジメントする

## 学びと実践を組み合わせ、OJT 型研修

コーディネーション力は、座学だけでは育ちません。研修には、持続可能な地域づくり、あるいはそのための市民、行政、企業、大学などの地域の異なる立場の人びとの協働を現場でコーディネートする OJT（オン・ザ・ジョブ・トレーニング）を組み込むことが重要なポイントとなります。

集合研修で学んだことを、自分の職場や活動に持ち帰って試してみる。その結果を次の集合研修に持ち寄って、現場で起こったことや困ったことを共有し、互いにアドバイスし合う。そうして受講生同士の切磋琢磨を重ねて、コーディネータースキルを磨いていく研修スタイルです。



## 地域のニーズ、実情に合わせて人を育てよう

ESD コーディネーター研修は、

- ① 地域のさまざまなコーディネーターに、ESD の視点をプラスすること
- ② 社会の課題解決に取り組んでいる人たちの、コーディネート力をアップすること

を目標にしています。

対象とする地域の広さ、参加者層、核とするテーマ、力点を置く要素など、地域のニーズや実情に合わせて設定しましょう。

スタッフや専門職員の  
研修を OJT 型に

〇〇リーダー養成講座に  
コーディネート視点を  
組み込んで

映像教材を活かして  
集合研修を効果的に



### <開催例>

- \* 公民館や市民センターのスタッフ研修で、地域課題をふまえた企画づくりを行う
- \* 環境、国際、人権、平和、福祉、多文化共生などのリーダー講座に、ファシリテーション、コーディネーションをプラスする
- \* ソーシャルワーカー、社会福祉士の研修に、題材として多文化共生を組み込む
- \* 多様な主体が協働する場（フューチャーセッションや円卓会議など）を OJT 研修として実施する



## ESD コーディネーター研修が扱う要素

ESD コーディネーター・プロジェクトでは、OJT 型研修のモデル実施を行い、その成果をもとに「コーディネーター研修が扱う要素」を以下のようにとりまとめました。

領域		細目	
1	ESD の視点を持つ	1-1	ESD とは
		1-2	ESD コーディネーターとは
		1-3	今の自分の活動と ESD との関係性を明確にする。
2	地域の課題を抽出する (調査と分析)	2-1	地域を観る (DO)
		2-2	地域の課題を考える (LOOK)
		2-3	課題を深める (THINK)
		2-4	課題達成のための糸口を見つける (GROW)
3	課題達成のための企画づくり	3-1	課題達成に向けた事業企画、ロードマップをつくる
		3-2	プログラムデザイン
		3-3	企画書を書く
4	協働と参画の進め方	4-1	多様な人を巻き込む
		4-2	実施に向けて
5	ファシリテーションのスキル	5-1	ファシリテーションの考え方
		5-2	グループワークの進め方
6	展開後のふりかえりと継続へ	6-1	成果のふりかえり
		6-2	ESD の視点によるチェック
		6-3	事後の展開に向けて



これらの要素は全部を一度の研修で扱うのではなく、地域や想定した受講生のニーズに合わせて、いくつかのポイントに絞り、OJT 型で行うことが大切です。なお、この要素と実際のモデル実施の対応表および詳細な実施プログラムは、「未来へつなぐ」のウェブサイトからご覧いただけます。

具体的なねらい	内容
ESD とは何か、基本的な要素を理解する。	ESD の考え方、歴史的な経緯、現状の取組例、ESD としてのポイント等。
ESD コーディネーターの役割や働きを理解する。	ESD コーディネーターとは何か、実際の役割や働き、求められる要素は何か、等。
ESD に必要な事項をおさえて共有し、現在各自が行っている活動との共通性や違いを認識し、今後の展開へ反映させられるようにする。	各自の ESD の活動として重視する点、外せない要素などを出しあい、グループでリスト化するワークショップ。
当該の地域がどのような状況で、どんな問題があるのか、実際に現場からつかむ。	地域を、タウンウォッチングやヒアリングのフィールドワークによって、自分の目と足で問題を見つけ出す。
その問題がどのような背景や関係性から生じているのか地域の課題がどこにあるのかを整理する	見つけられた問題群を整理・分析し、そこから明確化した課題に見える形で表現する。
課題の背景にある、見えにくい／語られにくい問題にまで、思考を深める。“見えるものから見えない物を考える”。	地域の文脈の中で、社会的構造の中で課題を捉え直す。時には新たな専門的知識の学習会も開く。
捉え直された課題をもとに、アイデアをブラッシュアップして課題達成のためのアイデアを出す。	より多くの地域の主体の共感を得て共に行動出来るかの視点が重要。自分たちの出来る事（ポテンシャル）と今ここでやるべき事（ポジショニング）から考える。
課題の関係者を集めて協働プロジェクトを立ち上げていく場の設定の仕方と、実際の展開のイメージをカタチにして参画する皆と共有する方法を身につける。	フューチャーセッションのプロセス等の学習の後、地域展開していくアイデアをどのように時間軸で進めるか、ロードマップに落とす。
実際の地域展開の場づくり、プログラムをどうつくるか、基本の要素やスキルを理解する。	プログラムデザインの考え方とポイント、実施例等を学ぶ。
地域展開の具体的なプランを立てて書面化し、第三者へプレゼンテーションしながらよりよい企画に育てていくやり方を体得する。	ブレインストーミング→企画書づくり→プレゼンテーション→精度を上げるための相互理解とアドバイス、という一連のプロセスを実習する。
多様な人を巻き込むこととはどういうことを理解し、コーディネーターとして人や組織のつなぎ方や多くの人に参画を呼びかける方法を習得する。	主体的な参画をいかに得ていくかを考え、協働の場をつくる方法やコーディネートのポイント、広報の手法等について、具体的事例を通じて基礎的スキルを学ぶ。
ワークショップの各ステージで知っておくと良いいくつかの手法に加えて、スタッフとのチーム体勢づくりなど、実施に向けて必要なポイントを習得する。	ワークショップのつくり方、ワールドカフェ等の参加を促すしかけ、実施体制づくり、チームでの動き方、準備と役割の整え方、等々について学ぶ。
ファシリテーションについて、基本事項やポイントを理解する。	効果的なファシリテーションについて、ファシリテーターの役割、そのポイント等。
グループワークなどを効果的に進めるためのスキルを体得する。	活性化するグループワークの進め方、そのポイント等。
事後のふりかえりの重要性を理解し、いいふりかえりの仕方を体得する。	実際の講座や活動を終えた後、それを次へつなぐためのふりかえりを効果的に行う。
ESD 視点でチェックすることで、常に活動をチェックしていくこと、成果から学ぶことを体得する。	行った講座や活動が ESD の視点にかなっていたか、効果的であったか検証し、改善点などを見つける。
次の展開をよりよいものにしていくための場とする。	課題や問題点を再確認し、活かせるものを抽出。次の展開につなげる。

## 映像教材を活用しよう

ESD コーディネーター・プロジェクトでは、OJT 型研修を理想の形をとっていますが、一方で現場を持つコーディネーターは多忙であり、現場を離れにくい状況にあり、なかなか長期の出張を伴う研修には参加しづらいのが現状です。このことをふまえ、集合研修に参加できない人にも研修内容を少しでも届けること、また集合研修の効率を上げることを目指し、映像教材の制作に取り組みました。

### 《映像教材の特徴1》手軽に観れる

ESD-J の映像教材は、なるべくテーマを細かく絞り、本数を多く分け、1 本が3分から10分以内としました。ネット環境があれば、いつでも、どこでも、何度でも、手軽に観ることができます。多忙な方も少しずつ、関心のあるテーマからご覧いただけます。

### 《映像教材の特徴2》MOOC 教材として活用できる

MOOC とは大規模公開オンライン講座 (Massive Open Online Courses) のこと。ネット上の映像コンテンツを受講者が事前に見てマスターした上で教室に来て、実際の授業はそれを前提にグループでのワークやディスカッションを行う形の講座です。集合研修の時間はとても貴重なので、基本的な知識や情報については事前に映像教材で予習したうえで集まり、直接顔を合わせて行うことに十分時間を取ることが可能となります。

2013 年から制作した映像教材は、6 テーマ・29 本。ぜひ皆さまの現場でもご活用ください。

#### 《映像教材メニュー》

\* 敬称略

### ESD 入門 編

#### ① ミッションムービー (2013 年 6 月制作)

ESD に取り組んできた皆さんに、どうして ESD に関わったか、何をそこで大事にしてきたか語っていただきました。実践者による ESD への思いや実践を通しての手応えを知ることで、ESD に取り組むイメージをつくっていただくムービーです。



#### ② SD ! ESD ! DESD ! (2015 年 3 月制作)

ESD はわかりやすく伝えることが非常に難しい概念です。とりわけ英語の頭文字がそのハードルを高くしているようです。このシリーズは、「SD」「ESD」「DESD」を段階的に、グラフィック (板書) でわかりやすく解説します。

- 1. SD : 持続可能な開発
- 2. ESD : 持続可能な開発のための教育
- 3. DESD : 持続可能な開発のための教育の 10 年
  - 1-3 解説 : 村上千里 (ESD-J 理事)
  - グラフィック : 志賀壮史 (グリーンシティ福岡理事)
- 4. 特別編「ファシリテーショングラフィック」を学ぼう
  - 4 解説・グラフィック : 志賀壮史 (同上)





### ③ ESD コーディネーターの7つのスキル (2014年3月制作)

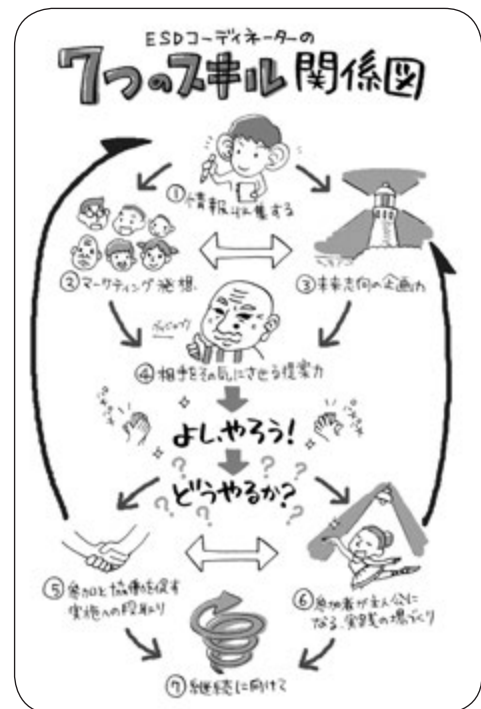
コーディネーションを進めていくプロセスを時系列で7段階にわけ、それぞれの段階で大事にしたいスキルや心構えを整理。なんと、これを1コマ漫画とナレーションで表現しました。「つついちゃうな」という自戒の想いも込めて「これはどうかな?」というツッコミと、「ここはこうしていくよね」のポイントをそれぞれに出しています。普段の活動をチェックするのにも活用ください。

- 0. イントロダクション
- 1. 情報収集
- 2. マーケティング発想
- 3. 未来志向の企画力
- 4. 相手をその気にさせるプロポーズ
- 5. 参加と協働のデザイン
- 6. 実践の場づくり、しくみづくり
- 7. 継続にむけて ~プロジェクト化、プログラム化

構成：森高一 (ESD-J 理事)

イラスト：鈴木律子

ナレーション：加藤大吾 (都留環境フォーラム代表理事)





# 2. OJT型研修モデル実施レポート

## ～研修デザインの参考に～

ESD コーディネーター・プロジェクトでは 2013 年度、広島と茨城で、地域の NPO の協力を得、OJT 型の ESD コーディネーター研修を実施しました。また、北九州市と岡山市はそれ以前から独自の予算で ESD コーディネーター研修を実施されていますが、2012 年度から本プロジェクトにも参画し、成果づくりに協力していただいています。ここでは、2013 年に実施されたモデル研修の概要と、その結果生まれた地域の取り組みをご紹介します。

広島



北九州



岡山



茨城



## 持続可能なまちづくりの鍵となる ESD コーディネーターを育む 「ESD 未来創造セミナー」及び「修了生サポート研修」

NPO 法人北九州サステナビリティ研究所 理事長 三隅 佳子



北九州市では、「環境未来都市」の実現に向けて、持続可能な社会づくりを進めています。それを担う人材を育むため、昨年度は当法人と市が協働で、ESD コーディネーター育成研修を実施し、45 名の修了生が誕生しました。しかし、研修後の地域でのコーディネーター活動は、コミュニティや課題に応じて、つなぐべき人やものなどが異なり、複雑な問題も多いため、即実践は、中々困難です。

そこで今年度は、昨年度同様の地域課題の発見と企画力を磨く「ESD 未来創造セミナー」に加えて、昨年の研修修了生を主な対象にして、実践に必要な知識やコーディネート力を高める「修了者サポート事業」を行いました。さらに、活動実績やノウハウを持つ「北九州 ESD 協議会」（現在 75 団体）の参加団体との対話の場をつくるとともに、同会が活動の助成を行うなど、いわば「駆け込み寺」的なサポートの仕組みづくりを行いました。

修了者サポート事業の研修では、岡山や北九州の事例なども参考にしながら、各研修者がそれぞれの地域で実践できる仕組みと計画を立てていきました。市民センターを中核に協議会をつくる、といった形が取り組みやすい地域もあれば、具体的な事業

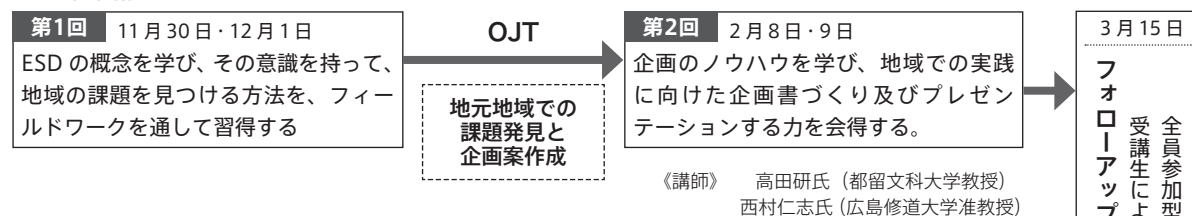


を実施するプロセスで、少しずつ関係団体を増やしていく（広げていく）といった形が入りやすい地域もありました。

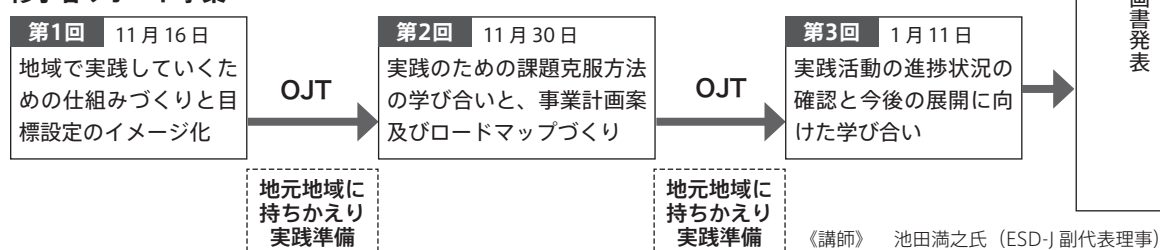
研修の結果、実行委員会を結成し、学習会を計画した団体もいくつか誕生しています。受講生からは、連携の効果や必要性を感じられるような場づくり・場回しのためにはコーディネーション力とファシリテーション力がカギであり、それらを高める研修をもっと行ってほしいという要望が出てきました。

北九州市との本協働プロジェクトでは、このようなニーズに応えながら、「ESD 未来創造セミナー」を受講した人々を核として、「北九州 100 万人市民が ESD 活動を実践！」を目指したいと考えています。

### ESD 未来創造セミナー



### 修了者サポート事業



## 使命、自信、スキルが学びあいの渦をおこす

### 個の暮らしの記憶を地域の財産として引き継ぐ

地域の記憶を記録として残すこと（アーカイブ化）があちこちで行われています。その意味は、アーカイブを活用して記憶の社会化を図り、地域教育として広げていくことによって、まちづくりや地域文化の創造につなげていくことにあります。

北九州市立平野市民センター渡辺館長は、昨夏以来、八幡大空襲の体験者たちの「時間が無い」「語ることができなくなってしまう」というつぶやきが気になっていました。なんとかこのつぶやきを形にすることができないかと思いあぐねていたときに、北九州 ESD 協議会から「ESD コーディネーター研修」の案内が届き、思いを企画に変えていく工程と出会いました。そうしてその企画の中で誕生したのが、「初めての聞き書き講座」「聞き書きボランティア養成講座」です。その成果は『「八幡大空襲」を生き抜いた人々が語り継ぐ 69 年目の記憶』という 250 部の冊子として図書館をはじめ地域に行きわたっています。



### 学びあいを通してお互いが元気になっていく

渡辺館長は、研修の中で講師や同僚たちから自分の企画が評価されたことによって自信が生まれ、「よしやってみよう」と講座を起しました。講座の中で空襲体験者たちは生き生きと語り、もっと伝えたいと元気になっていきました。聞き書きをしたボランティアたちも自分たちの役割を確認することができ、この動きはどんどん大きくなっていきそうです。

この経験は ESD コーディネーターの大切な役割を語っています。当事者、当事者から学ぶ学習者、学んだことを社会化するための講座という出会いの場、学んだ成果を地域に広げるツールの活用、といった要素が、



聞き書きの様子

＜個の暮らしの記憶を地域の財産として引きつぐ＞という使命によってつなげられることで学びあいの渦が起きはじめたのです。

### 過去から学び現在を点検し未来を描く

北九州の ESD は、公害を克服した婦人会をはじめとする市民、自治体、企業、研究者のパートナーシップを母体として進められてきました。公害の克服の成果はまた、工業化の光と影を圧縮して体験しつつあるアジアの人たちと共有されています。こうした地域の独自の歴史とアジア・世界とのつながりをこれからの地域づくりに活かしていくためにこそ、過去から学び現在を点検し未来を描く、という ESD の学びあいが求められているのです。

北九州 ESD 協議会へのお問合せは  
Tel 093-661-2133  
メール k-esd@k-esd.jp  
ホームページ <http://www.k-esd.jp/>



## 地域コーディネータースクール「地域とテーマの幸せな出会い」 ～既存のコーディネーターとつながる取り組み～

環境教育事務所 Leaf 代表 河野 宏樹



### ■地域とテーマの幸せな出会い

2013 年度に ESD コーディネーター研修を広島地区で行いました。研修の企画段階で浮かび上がってきた問題は以下のような二点です。

- A) 優れたテーマの設定により事業の盛り上がりはあるが、どこでもできる地域性に乏しい事業がコーディネートされている場合がある。
- B) A と逆で、地域に密着した事業ではあるが、マンネリ化しており新しい切り口やテーマ性に乏しい事業がコーディネートされている場合がある。

そこで研修のテーマとして「地域とテーマの幸せな出会い」を設定しました。ESD の事業を展開していく上では「地域性」と「テーマ性」の両方がうまく出会っていく必要があると考えています。上記のような問題が発生しているのは、地域とテーマがうまく出会っていないため、もしくはどちらかのみが機能しているためであると考えられます。そこで、コーディネーターが事業に関わるステークホルダーにとって魅力的なテーマ性をつくと同時に、特定の地域にこだわり地域の持続可能性というキーワードが浮かび上がってくる事業を展開できるようにすることを目指しました。

### ■研修企画の中身と工夫

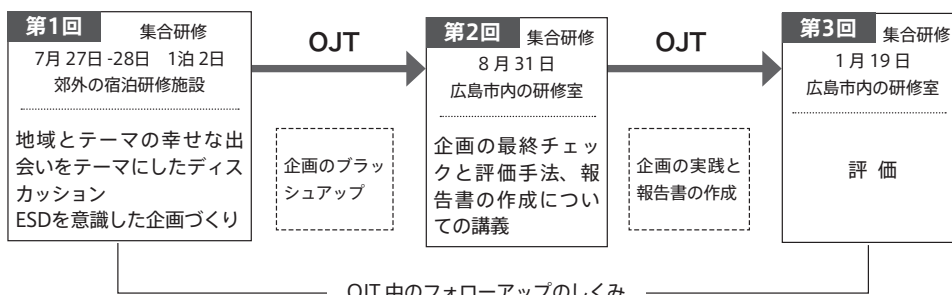
本研修は、コーディネーターの現場で実践しながら研修効果を検証していく OJT (On the Job Training) 型で行いました。3 回の集合研修(第 1 回：オリエンテーションと企画／1泊2日、第 2 回：企画の発表と共有／1 日帰り、第 3 回：実施した企画の評価／1 日帰り)とその間に OJT を入れて行う方法としました。

研修全体の目標としては、「ESD の視点がない、

もしくは意識化されていない参加者（コーディネーター）が、ESD を自分の言葉で捉え自らの活動に活かすことができる。」を設定しました。1 回目の集合研修の中では ESD の概念にも触れ、「自分たちの地域で未来に残したいことは何か？」という問いを考えながら、各参加者が実践していく企画を考えるという内容にしました。2 回目の集合研修では、全員の企画を発表しながら、修正とフィードバックを行いました。3 回目の集合研修では、事業報告書や評価表を元に各プロジェクトがどのような成果を挙げることができたのか全体で共有しました。企画書の通り進行できたプロジェクトと、諸事情の調整の中で当初の実施内容と変わったプロジェクトがありました。地域のコーディネーションを行う場合、常に様々な流動的な要素の中で企画や評価内容を変更する必要があります。わずか 4 ヶ月の本研修の中でも、各プロジェクトの中でダイナミックな変化を遂げていることを参加者の発表を通じて感じることができました。

### ■研修の成果

20 名の参加者が参加し、4 ヶ月の研修期間中に 10 本の企画が誕生しました。その一部のタイトルを紹介すると、「EXPO 東千田」～東千田界隈の商店と並びの空き店舗を使ったマルシェ～、「もちつき & ファイヤー」～父親が地域活動で交流するためのイベント～、「広島のカッコいい!? 大人に会おう!」～子どものキャリア教育プロジェクト～、といったユニークなものばかり。事業を現在も継続しているものも少なくありません。本研修が事業のスタートアップを支援する形で機能することができたことは一つの成果です。



●定期的なサロン(市内の事務所にて) ●Facebook グループ ●相互視察

## 小さなマルシェが街を開く ～ EXPO 東千田の取り組みを例に～

### 空き店舗でマルシェを



マルシェで賑わう空き店舗

全国的に 1980 年代後半より、商店街の衰退による空き店舗の増加が社会問題になっています。広島市中心部も例外ではなく、1959 年に発足した千田商店街は 2012 年に法人解散しました。その一方、近年では都市型ファミリー向けマンションの建設が相次ぎ、住民の属性が年々変化しています。

このような社会情勢の中、東千田地区でサンドイッチ店を営む K さんは、同じ地区にあるいくつかの商店に声をかけ、空き店舗を活用しながら小さなマルシェを開催することを提案しました。K さんは時を同じくして、「地域コーディネータースクール」にも参加。参加者の中でチームを作ってこのプロジェクトを支援することになりました。

マルシェのネーミングは「EXPO 東千田」。東千田界隈の店舗や関係のある作家も巻き込んで、「小さいながらも大きな賑わい」を演出することを目指しました。出店は雑貨・サンドイッチ・焼き菓子・アクセサリー・古着の販売、ぬり絵ワークショップ、習字や洋裁の体験、綿あめ作り、似顔絵と多彩な顔ぶれ。当日は約 300 人を超える来場者が東千田地区を賑わせることに成功しました。

### テーマと地域のしあわせな出会い

地域コーディネータースクールでは、「テーマと地域のしあわせな出会い」をコンセプトに、「地域の持続可能性ってなんだろう？」を考えていきました。K さんにとっての「持続可能性」とは、「肩肘はらずに、マルシェのようなゆる～い空間を、地域で提供すること」。これまでの大規模商店街とは違い、隣三軒の商店がお互いに連携を取りながら、小さなイベントを開催していく中で「地域の持続可能性」というキーワードが見えてくるのではないかと考えます。



### コーディネーターは地域の外からも

今回の地域コーディネータースクールで作ったプロジェクトチームには、K さんの他にも地域外のコーディネーターも加わりました。地域外のコーディネーターが加わることによって新しい視点が生まれる一方、地域の人に受け入れられるための密接なコミュニケーションが必要となります。地域の自発的な活動を、適切に支援するコーディネーターが、「テーマと地域のしあわせな出会い」にとって重要な役割を果たしています。今後も継続して EXPO 東千田は開催予定。地域の住民や常連客の中からコーディネーターの役割を担う人材が現れれば理想的と考えています。

環境教育事務所 Leaf へのお問合せは

メール kono@4leaves.jp

ホームページ <http://4leaves.jp>

# 地域のみかた

## ～公民館職員のエンパワメントによる地域力向上～

岡山市立中央公民館 主任 重森 しおり



岡山市で実施した ESD コーディネーター研修は、ESD 推進の拠点である公民館職員を対象とし、OJT 型で行いました。これまでも公民館職員対象の ESD 研修を継続的に実施してきましたが、今年度は基礎である「企画力アップ」を目的として実施しました。

公民館の活動自体が ESD と重なっている部分も多く、第 1 回目の初日は「公民館をどう捉えているか？」を、志賀誠治さん（人間科学研究所）のファシリテーションで考えていくことから始めました。そして翌日は、地域課題の見つけ方や抽出方法などを学びました。

それぞれの公民館で課題を把握してくることが宿題となり、それを持ち寄って 2 回目の研修を受けました。ここから、生みの苦しみの始まりです。企画の作法を学び、それぞれが次年度に実施する事業を企画書に落としていきます。企画書作成に足りない部分や、グループでの意見を踏まえて、再度それぞれの公民館に持ち帰り、分析と内容の検討を重ね、3 回目の研修では作成した企画書の発表会を行いました。

みんな、地域の文脈を読み取りながら、何度も書き直したり、書き直したりしながら完成させた企画書なので、発表後の意見交換は、とても活発で有意義なものとなりました。

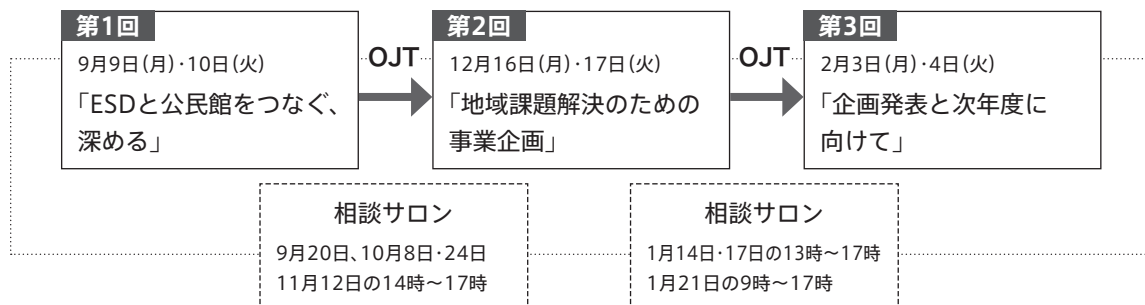
研修の最終日は、今回の企画書に「ESD」という視点が入っているかどうかを「ESD めがねをかけて見直す」というワークショップで行いました。このことで、各自が ESD の視点には何があるのか。についても考えることにつながり、多角的な視点で企画書を見直すことになりました。



今回の研修では、「チームで取り組む」ということにも力を入れました。研修は公民館の開館日に行うため、参加できる職員は一人です。これまでも参加した職員が館に戻って報告・共有してはいましたが、今回は「館としてチームで取り組んでいきましょう」と最初から決めて進めました。

研修で学んだことの共有だけでなく、研修と研修の間にある地域課題把握・分析などをそれぞれ工夫してみんなで取り組んだことで、館としての団結が深まったり、次年度、事業実施がしやすくなったと思います。研修が終わったときの達成感や、評価のときの意見についても、チームで共有することとなり、「今までの研修の中で一番大変だったけど、とても充足感がある」というふりかえりがありました。

また、それぞれの公民館職員がチームとして取り組むのを、ESD 担当者と連携してチームとなってフォローしていく「しくみ」が、OJT 研修を進める上で必要だとも感じました。参加者も企画者もとても大変な半年間でしたが、今ではこれをどんな形で進めていこうかとワクワクしています。





## 世界という視野、地域の内外という視点で学びをつなぐ

### まず公民館職員がコーディネーターに



岡山市にも「コーディネーター」と呼ばれる人はたくさんいます。それぞれが所属している団体、グループ、個人や活動をつなげる役割を果たしています。

しかし、地域にある課題は複雑に関係あっていて、1つの団体だけで解決することはできません。地域のさまざまな人や物が関わることで、少しずつ良くなっていきます。岡山市では、地域(中学校区)にある公民館が拠点となって、まずはそこで働く職員が「地域のコーディネーター」になれるよう研修等を行い、ESDを進めています。

岡山市の公民館職員は、地元採用ではなく5年を目処に異動があります。なので、地域の人たちにとって見れば「ヨソモノ」です。だからこそ、これまでの経験やつながりを活かした取り組みや視点を地域に吹き込みながら、フラット

(中立)な立場でいることができます。一方で、地域課題に取り組む一員としての自覚を持つことも大切です。「私はコーディネーターだから」と、活動する人たちの外にいたのでは、本当に必要とされるコーディネートはできないし、地域の担い手を育てることもできません。地域住民と一緒に地域を歩き、地域の良さを探して共有することを大事にしています。

### 分野横断的な学びと活動へ

これまで分野中心の事業を進めてきましたが、分野横断的な活動へ広げることが大切だと感じています。入口が「国際理解」の場合でも、単にいろいろな国の状況を知るだけでなく、女性問題、環境、食など、様々な視点から物事を見て話し合う場づくりを進めることを心がけています。「地域」という視点で活動する中に「世界」の視野が入ることで、関わる人や活動を広げることができます。そのための学びと活動の場として公民館があり、ESDの視点をもったコーディネーターが活躍することで、より豊かな地域を創っていくことができるでしょう。

とはいえ、中学校区という広い地域を公民館職員だけでコーディネートするのは無理があります。今後は、コーディネーターとして活躍している人や地域のリーダーたちとESDを共有し、10月の「ESD推進のための公民館－CLC国際会議」もその1つのきっかけになればと準備を進めています。



ESD コーディネーター研修の様子

岡山市立中央公民館へのお問合せは

Tel 086-272-7886

メール chuoukouminkan@city.okayama.jp

ホームページ [http://www.city.okayama.jp/okayama/okayama\\_00078.html](http://www.city.okayama.jp/okayama/okayama_00078.html)

# 共創空間をコーディネートする人材と ESD センターをつくる

認定 NPO 法人茨城 NPO センター・コモンズ事務局長 横田 能洋



## ■地域の遊休施設が舞台

当会では、茨城の市民活動の状況や県の「新しい公共推進指針」などを背景に、活動テーマやセクターを横につなぐコーディネーターが必要と考えていました。そこに、水戸市大工町の「トモス水戸」の未使用フロアを市民活動の拠点として活用できる話が持ち上がったことで、このコーディネーター研修を企画することになりました。

研修のねらいは、地域の遊休施設など地域の資源を活用し、多様な主体のコラボレーションを仕掛けることで、学びあい、助け合い をコーディネートする力を高め、多様な学びと活動の拠点と、人的ネットワークを築くこと。受講生は、環境、国際協力、バリアフリー、農業、福祉、まちづくり、多文化共生など各分野のキーパーソンとしてネットワークづくりを仕掛けている人、場の提供を通じて地域貢献に関わりたい金融機関や不動産会社、大学の関係者など 15 名に直接声をかけて集めました。

## ■フューチャーセンターセッションの企画運営を OJT に

研修では「トモス水戸」を舞台に、地域で様々な活動をしている人や地域の課題を集め、知恵やアイデアを融合させて新たな活動、つながりを生み出すためのフューチャーセンターセッションを企画運営することを OJT と位置づけました。そのため、4 回にわたるコーディネーター研修は、イベントの企画会議を兼ねた内容となりました。

## ■研修内容

1 回目は、廃校活用事例や、古民家を改装したギャラリーなどの経験談をふまえ、共創空間とそのコーディネーターの役割について考えました。2 回目は、



どうしたら限られた時間で互いに知り合えるか、自己紹介や討議グループのつくり方について検討しました。

3 回目は、フューチャーセンターセッションの開始前に、コーディネーターとしての在り方と、自由に話せるためのルールを検討しながらプログラムの修正、参加者の関心事項を頭に入れる作業を行いました。そして 3 時間のセッションで、コーディネーターとしてその場で工夫しながら、つなぎ役を実践。当日は、80 名もの参加がありました。

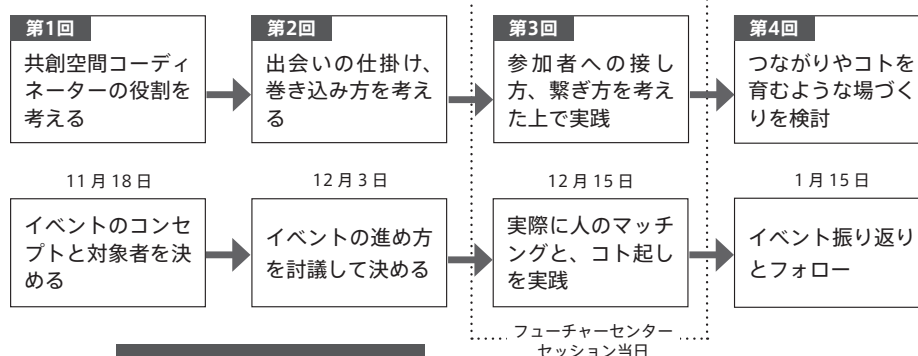
4 回目は、研修の振り返りを行いつつ、セッションで生まれた共創の種である事業アイデアを具体化させるための次のセッションを企画しました。

## ■研修の成果と今後に向けて

受講生たちは OJT 研修を通じて、特定の分野ばかり考えていた自分に気づき、異分野、異業種とつながる意義や、共感・共創することの大切さを感じたようです。フューチャーセッションの参加者の多くは、生まれたアイデアの次の展開に関心と参加意欲をもっているため、火を消さないように提案者をフォローし、事業を具体化していくのが今後のミッションです。そして、常にコーディネーターが集える常設の ESD センターを水戸に実現したいと考えています。

## コーディネーター 研修としての展開

## 実践の場としての フューチャーセッ ションの企画会議 としての展開



研修全体が OJT 型の研修

## 異分野のキーパーソンが集うと共創空間が生まれる

### 地域の遊休スペースを市民の学びの場にかえる

地域には、廃校、空き店舗、ビルの空きフロアなど、活動や学びの拠点になりうる空間がたくさんあります。地域貢献したい企業もあります。けれどそれぞれが別々の拠点で活動しているため分野を越えてつながる機会が少なく、活動がマンネリ化してしまったり、人や場所や資金が足りないという課題につながります。

茨城での「ESD コーディネーター研修」には、まちづくりに関心のある行政マン、場所をいかしたい企業オーナーや金融機関のCSR担当、フェアトレードを広めたいNGOなど、多様なキーパーソンが集まりました。ビルの空きスペースを使い、誰でも参加できるフューチャーセンターセッションを実施。コーディネーターが人をつなぐ仲人に徹した結果、グローカルフェスタなど、いくつかのコラボレーション企画が実現しました。



グローカルフェスタいばらき 2014

### 多様性と柔軟性を大事にして人と活動をつなぐ

未来を変えたい人

多様なNPO

企業とNPO

行政の協働関係

民間団体

大学の地域連携担当

会場

ダイア

12月15日(日) 13:30~16:30

会場 トモス水戸 東館2F (水戸市水戸区1-3-3)

**フューチャーセンター ∞ 茨城**

**「NPOが拓くわたしたちの未来」**

セッション1: この15年の各団体の変化、経験を共有する

セッション2: これから取り組むべき課題、地域の人と協働のあり方

セッション3: 関心あるテーマごとに、事業アイデアを交換する

セッション4: 未来デザインに交換会を開催する

共同で地域の未来を拓く、市民社会のコーディネーター

**COMMONS**

12月15日はNPO法施行から15年です。そこで222まで集った県内NPOの法人と様々なセクターの人が交流できる場を開催します。フューチャーセンターは、相違を超えて未来志向で対話し、関係性と共創の場をつくり出します。

協賛NPO法人  
茨城NPOセンター・ commons  
水戸市議会2139  
茨城県労働局2139  
TEL: 029-300-4321  
FAX: 029-300-4320  
URL: [www.npocommons.org](http://www.npocommons.org)

昨年12月に開かれたフューチャーセンターセッションの案内

セッションでは、小学生も一市民としてプレゼンし、学生の提案に企業の社長が叱咤激励したりしました。普段ワークショップに参加しないような人も地域の大事なアクター。こうした人を招くこともコーディネーターの役割です。多様な視点から得られる刺激とアイデアに賛同してくれる味方が得られると、コトは自然と動き出します。発案した人の主体性を大事にしながら手伝うことで、企画が形になるという成功体験を共有すると、仲間の関係ができていきます。

こうした場づくりを通じて、組織の枠を超えて関わりあうプロセスを学びながら変化を起こすことが、研修の柱でした。組織の縦割りは市民の現場にもあります。「その課題は自分には関係がない」、「そのやり方は自分たちとは違う」といったセクショナリズムや心の壁を取り除いていくことが大事です。単にリソースを出し合うだけでなく、課題を多面的に検討することで、活動の深みが生まれ、それが多様な人の参加を促し、持続性にもつながります。

### 活動して地域の課題に気づき、そこから学ぶ

イベントの成功がゴールではありません。イベントで出会った人と次に何ができるか、活動で生まれた変化を関係者にどう伝えるか。つぶやきや出会い、前向きな提案があったら、すぐに判断しないでどうしたらそれをいかせるか、どことどこがつながったら無理なくできそうか、組合せを常に考えること。ESDの活動に終わりはありません。

茨城 NPO センター・ commons へのお問合せは  
Tel 029-300-4321  
メール [info@npocommons.org](mailto:info@npocommons.org)  
ホームページ <http://www.npocommons.org/>

## ESD コーディネータープロジェクトに参加・協力くださった皆さま（敬称略）

---

### ■ OJT 研修講師【2012-14】

高田 研（都留文科大学）【湯来、北九州】  
志賀 誠治（人間科学研究所）【湯来、広島、岡山】  
河野 宏樹（環境教育事務所 Leaf）【湯来、広島】  
西村 仁志（広島修道大学）【湯来、北九州】  
壽賀 一仁（いりあい よりあい まなびあいネットワーク）【湯来】  
森 良（エコ・コミュニケーションセンター）【湯来、茨城】  
池田 満之（岡山ユネスコ協会）【湯来、北九州】  
川嶋 直（日本環境教育フォーラム）【湯来】  
森 高一（日本エコツーリズムセンター）【湯来】

### ■ OJT 研修開催協力団体、検討参加団体【2012-14】

九州地区：北九州市、北九州サスティナビリティ研究所  
岡山地区：岡山市、岡山市立中央公民館、EPO ちゅうごく  
広島地区：環境教育事務所 Leaf、ひろしまジン大学、湯来交流体験センター、ひろしま NPO センター  
関東地区：茨城 NPO センター・コモンズ、稲城市教育委員会

### ■ 映像教材制作【2013-14】

森 高一  
川嶋 直  
（出演者は p8 ～ 10 参照）

### ■ ビジョン & カリキュラム枠組検討ワーキング【2012】

早瀬 昇（大阪ボランティア協会）  
柴尾 智子（ACCU、ユネスコスクール事務局）  
千葉 正法（稲城市教育委員会）  
川嶋 直、高田 研  
壽賀 一仁、森 良、枚本 育生、池田 満之、重 政子（ESD-J）

### ■ 関東コーディネーター学びあいワーキング【2012】

茨城：横田 能洋（茨城 NPO センターコモンズ）  
栃木：菊地 敦子（ワークショッププリコ）  
群馬：太田 祥一（群馬県生涯学習課）  
埼玉：長岡 素彦（ESD さいたま）  
千葉：横山 清美、桑波多和子氏（環境パートナーシップちば）  
東京：小原 宗一（日本ボランティアコーディネーター協会）  
新潟：阿部 巧（中越防災安全推進機構 復興デザインセンター）  
山梨：加藤 大吾（都留環境フォーラム）  
静岡：鈴木 まり子（わくわくコミュニティ世話人）

### ■ 事務局【2012-14】

村上千里、飯島邦子、山本かおり、笹川貴吏子



# 3. ESD コーディネーター研修 2014 実施レポート

本研修は、3年間のプロジェクトの集大成であり、2015年以降にその成果をつないでいく場として、ESD コーディネーターの育成を目指す研修を企画実施しようとしている方々（主催者および講師予備軍）を対象に、ESD-J が提案する研修を体験していただき、来年度以降、各地での研修実施を検討していただくことを目的として開催しました。プログラムは、ESD のコーディネートに最も重要であり、かつ難しい「地域の問題を知り、掘り下げ、真の課題を踏まえつつも、人々の主体的な参加を引き出すような魅力的な企画につくりあげる方法」に重点を置いたものとなりました。

研修には全国から 18 名が参加。研修の構成は、

- ① コーディネーター研修受講生の立場で「地域の課題を知る」の進め方を体験的に学ぶ
- ② その体験を踏まえて、研修の企画者や実施者として、自身の現場での ESD コーディネーター研修を計画する

の二本立てとなっています。



志賀さんのレクチャー



古民家 SATOYAMA でのセッション



夜の作業風景



河野さんの解説

# 「地域の課題を知る」を極めるワークショップ3日間 ～ ESD コーディネーター研修～

## ▼ 実施概要

【日時】 2015 年 1 月 19 日 (月) 11:00 ～ 21 日 (水) 15:45

【会場】 研修：湯来交流体験センター、古民家 SATOYAMA (広島県広島市佐伯区湯来町<sup>ゆきちょう</sup>)

宿泊：湯来ロッジ

- 【目標】
- 1) ESD コーディネーター養成カリキュラムの全体像を把握する
  - 2) カリキュラムの中の「地域の課題を知る」の進め方を体験的に学ぶ
  - 3) 2015 年度の ESD コーディネーター養成研修の計画をつくる



## ▼ プログラム (1 日目)

1 月 19 日 (月)		
11:00	オープニング • オリエンテーション 担当：村上千里 • アイスブレイク・自己紹介など 担当：河野宏樹	湯来交流体験センター
11:30	ESD コーディネーター養成カリキュラムの紹介 担当：壽賀 一仁	
11:45	昼食	
12:30	フィールドワークオリエンテーション • 中国地方の抱える問題の背景 担当：志賀誠治 • 湯来町の概要 担当：河野宏樹 • フィールドワークの心得説明 担当：西村 仁志	
14:00	フィールドワーク「地域を観る」 • 4 コースに分かれて地域の課題を発見する ① 一次産業 (農業、林業、漁業) グループ担当：壽賀一仁 ② 観光 (温泉) グループ担当：森高一 ③ 暮らし (文化) グループ担当：池田満之 ④ 暮らし (定住促進) グループ担当：森良 フィールドワークフォロー：川嶋直、志賀誠治、西村仁志	湯来ロッジ周辺
17:00	湯来ロッジ到着、チェックイン、夕食までフリータイム	湯来ロッジ
18:00	夕食	
19:30	グループワーク「地域の課題を考える」 進行：志賀誠治、川嶋直	古民家 SATOYAMA
21:00	フリータイム (懇親会)	

## ▼ 講師、研修コーディネーター

研修コーディネーター



志賀 誠治  
人間科学研究所



河野 宏樹  
環境教育事務所 Leaf

講師



高田 研  
都留文科大学



池田 満之  
岡山ユネスコ協会



森 良  
エコ・コミュニケー  
ションセンター



壽賀 一仁  
あいあいネット



森 高一  
日本エコツーリズム  
センター



川嶋 直  
日本環境教育  
フォーラム



西村 仁志  
広島修道大学

## ▼ プログラム(2-3 日目)

1月20日(火)		
7:30	朝食	湯来ロッジ
9:00	全体ワーク「課題を深める」 • ヒアリング結果と抽出課題の発表 & 意見交換	湯来交流体験 センター
	担当：志賀誠治	
10:30	グループワーク：検討課題の決定→提案プロジェクトづくり • 発表準備の説明：KP 法をベースに • 提案プロジェクトの検討	
	担当：川嶋直	
	(途中昼食)	
15:00	中間発表 • 各グループの発表 • 講師からのアドバイス	湯来ロッジ
	担当：川嶋直、志賀誠治、河野宏樹	
15:50	グループワーク：提案プロジェクトづくり	
	グループ担当	
18:00	夕食	湯来ロッジ
19:30	グループワーク：提案プロジェクトづくり	古民家 SATOYAMA
	グループ担当	
20:00	懇親会および発表会の準備	

1月21日(水)		
7:30	朝食、チェックアウト	湯来ロッジ
9:00	発表会・地域の方を交えた意見交換	湯来交流体験 センター
11:00	本研修に関する意図開き • 意図開き	
	進行：志賀誠治 進行：川嶋直 担当：河野宏樹、志賀誠治、村上千里	
12:00	昼食	
12:50	ESD コーディネーター映像教材の紹介	
	担当：森高一	
13:10	ワーク：自分のフィールドにおける ESD コーディネーター研修の計画づくり 進行：川嶋直 • 各自（一部グループで）アクションプランづくり • 任意のグループになって、アクションプランの共有	湯来交流体験 センター
	グループ担当：壽賀一仁、森高一、池田満之、森良、河野宏樹、志賀誠治	
15:00	クロージングセッション	
	担当：河野宏樹	
15:45	終了	

## 1 日目

### オープニング

#### ■ オリエンテーション（説明：村上）

主催者である ESD-J より、以下のついでの説明を行った。

- 本研修のバックグラウンドとしての ESD の 10 年の状況
- ESD におけるコーディネーターの重要性と、ESD コーディネータープロジェクトの概要
- 本研修の目的とプログラムの構成、講師及びスタッフの紹介

#### ■ 参加者自己紹介（進行：河野）

A4 用紙に講師・参加者ともに「所属と名前」「私の最近のお気に入り」「今の気分」「研修に期待すること」を記入し、アトランダムに自己紹介（一組 2 分程度）を数ラウンド行った。自己紹介シートは壁に掲示し、休憩などに見ることができるようにした。

#### ■ ESD コーディネーター養成カリキュラムの紹介（説明：壽賀）

ESD-J が 3 年プロジェクトで取り組んでいる「ESD コーディネータープロジェクト」で作成した研究カリキュラムの全体像と、今回の研修の位置づけについて説明した。

### フィールドワーク・オリエンテーション

#### ■ 中国地方の抱える問題の背景（説明：志賀）

これから湯来町をフィールドにヒアリング調査を行い、問題を掘り下げ、課題の抽出を経て ESD 的な事業の提案作成を行うことから、そのフィールドである湯来町のバックグラウンドについて基礎的な情報を共有した。

##### 講義内容

日本の高齢化は西高東低。中国地方は、過疎高齢化の先進地といわれている。広島県の市町村は平成の合併で 1/4 強に減っている。限界集落数は 2,672 集落、高齢化率は 35%～45%。その理由として、4 つのポイントが挙げられる。

- 現状 1：3 つの黒：中国地方を支えていたのは、黒毛和牛、タタラ製鉄、木炭。近代化が進む中で、いずれもすたれていった産業である。
- 現状 2：挙家離村：集落の小規模性（川に沿って小さな集落が点在）、農業の零細性、都市との隣接性（瀬戸内海重工業地帯の発展）などから、出稼ぎではなく、家族ぐるみで都市に移住し、集落には時々帰って農業を続ける、といった生活を選ぶ人が増加。豪雪、水害等が引き金になって離村が進んでいる。
- 現状 3：3 つの空洞化：人の空洞化（働き盛りが村を離れる）、土地の空洞化（高齢化で耕作放棄地が増えていく）、村の空洞化（集落が維持できなくなる）
- 現状 4：市町村合併：行政のスリム化、行財政改革の一環で市町村合併が進む。湯来町は広島市と合併、役場が支所になった。湯来町のことが分からない行政マンが支所に赴任することも増えている。

#### ■ 湯来町の概要（説明：河野）

##### 講義内容

- 概要：地図と人口推移、人口構成などの基礎情報を元に、町の概要を把握。  
2004 年の市町村合併で広島市佐伯区（人口 12 万人）の一部となる。旧湯来町は人口 6000 人。湯来町は、水内地区（湯の山温泉）、上水内区（湯来温泉）、砂谷地区（牧場がある）に分かれている。
- 歴史：昔の写真などを見せながら、高度経済成長期にはボーリング場などもあるにぎやかな温泉街であったこと、昭和初期～戦後までは林業が盛んだったことなどを紹介。

- ・現在： 援農隊（上多田地区）、特産品売り場、学校と地域の交流活動（田楽、魚の放流など年間10数日）、湯来の市民活動（湯来交流体験センター、古民家 SOTOYAMA）、Iターンの動き（Cafe おそらゆきなど）などを紹介。

そのうえで、今回お会いできる方々をコース別に簡単に紹介した。

## ■ ヒアリングの心得（説明：西村）

「聞き取りから始める ESD」と題して、講師よりヒアリングの目的と、気をつけておくべきことについて講義を行った。

### 講義内容

#### 👉 問題と課題は区別する

問題は解決が求められる困ったこと、課題は解決のために設定する目標、ゴール。問題は解決すること、課題は達成すること。ボヤキをやる気に。

#### 👉 地域の人々の「語り」から「意味」を汲み上げる

他者の思いに共感しながら聞こう。

#### 👉 記憶の箱

ヒアリングで聞いたことをそのまま真実としてとりまとめようとしがちであるが、話者は記憶の箱を持っていて、その中から引きだして語っていることを知っておく。

#### 👉 2枚のフィルターの存在

- ① 実際に起こったことは、自分自身の感情や欲望、思想などから経験され、解釈されているというフィルター＝問題の構造・本質を見極め、課題を設定することが必要
- ② 地縁、血縁のない我々に対して語られるというフィルター

#### 👉 ストーリーを構築する文脈を理解する

今どう思っているのか、当時どう思ったのか、は全然違う。年と当時の年齢を確認しながら聴くといい。

#### 👉 対面による身体感覚「言葉の情報」を超える

直接聞く意味は、対面による身体感覚。語りを通して伝わってくるその人の感覚・体験を受け取ることは貴重な機会。

#### 👉 「学ぶべき内容」が先にあるのではない

すべてゼロから共に作り上げるものだと思います。

「地を歩き、人と出会い、仲間と議論し、葛藤する」（高田研氏）

#### 👉 問題に迫るための地域の実感、生の声を聞く

どうなりたいか？も聞くのが大事。その間のギャップから課題が見えてくる。

#### 👉 地域に入るときのマナー

自分たちが持って帰るだけでなく、地域へお返しをすることが大事。本研修では、最終日に、皆さんが作成した提案を地域の方々に聞いていただく。また、インタビューの内容を報告書に入れる。



## フィールドワーク

### ■ グループに分かれてヒアリング

参加者が希望するテーマで4つのグループに分かれ、それぞれにヒアリングを実施。夕食後、ヒアリング結果を模造紙に取りまとめた。

#### 第一次産業グループ



神田 信治さん（神田木材 / NPO 法人湯来里守機構副理事長）

白井 一良さん（上多田地区町内会連合会長）



#### 観光グループ



武田 真哉さん（湯来交流会館交流センター・センター長）

岡 真理さん（NPO 法人ひろしま NPO センター  
／古民家 SATOYAMA 館長）



有本 寿夫さん（湯来温泉河鹿荘  
／ NPO 法人湯来観光地域づくり公社代表）

森井 和也さん（湯の山温泉森井旅館  
／水内の将来をつくる会会長／五日市商工会青年部副部長）



#### くらし（文化）グループ



國沢 紀代子さん（ゆき商店／ NPO 法人湯来観光地域づくり公社理事）

清水 美緒さん（湯来南高校 2 年生）



#### くらし（定住促進）グループ



光井 利成さん（NPO 法人湯来里守機構副理事長／広島ガス湯来販売  
さともし き こう

佐藤 亮太さん（Cafe おそらゆき）





## 2 日目

### 共有

#### ■ ヒアリングの結果の共有

1 日目の夜にまとめたヒアリング結果を全員で共有、設定した課題についての質疑や感想などを述べ合った。

### 問題点の整理、掘り下げ↓課題の抽出↓提案作成作業

#### ■ 提案づくりまでのプロセスの説明 (担当：志賀)

見えてきた問題について、本当にその課題設定でいいのかを何度も問い直してほしい。

課題の設定には2つの方法がある。ひとつは「抽出」、もうひとつは「統合」。

そして、その課題を達成できる提案を作成する。本研修はESD コーディネーターの研修なので、提案は単なるまちづくり企画ではなく、地域の未来を拓く学びとESDの提案をつくることを意識する。

#### ■ 発表方法の説明 (担当：川嶋)

発表は1グループ10分。方法はKP法(紙芝居プレゼンテーション法)。

コミュニケーションはキャッチボール。受けてのことを考えて要点を絞り、記憶しやすい形にパッケージ化することが大切。



#### ■ 提案作成作業の中間報告 (担当：河野、川嶋、志賀)

各グループからの発表を受け、グループ担当以外の講師から、提案作成に向けたアドバイスを行った。

##### 【アドバイスの概要】

- ・ 提案プロジェクトは“誰がするのか？”を明確にするとよい。
- ・ ESD はみんなで未来を描く練習。
- ・ 協議会はネットワーク。それは今もたくさん作られている。しかしネットワークだけでは動かない、ということが経験からわかってきている。有効なのは、ワーキングネット。まずは一緒にワークする、そのためのつながりから始めるとよい。
- ・ 求心力のあるプロジェクト。みんなが「それならやりたい」と思える仕掛けを考えよう。(例：山口県熊毛町光丘小学校の子どもたちの提言書づくり)
- ・ お年よりも、死ぬまで学ぶ、死ぬときが一番成長している、というのがよいのではないかな。



#### ■ 発表準備

グループごとに、翌朝発表に向けた準備を行った。





## 3 日目

### 提案発表

会場にはヒアリングに協力してくださった方々や地域の方々におこしいただき、各グループから提案を発表した。

#### 第一次産業グループ

##### テーマ： かみ た だ 上多田人 わく湧くプロジェクト

人口減少や人工林の荒廃といった問題を解決し、上多田のたくさんの魅力を伝えていくために、未来を共に考え行動する人を増やすプロジェクト。「上多田つどいの場：郷土料理教室や様々な体験活動を通して、地域住民・観光客・Iターン者・移住希望者等が交流する」と「上多田聞き書き：地元の高齢者のお話を、地域で活動を行っている大学生たちが聞き、まとめ、発信する」からなる。

#### 観光グループ

##### テーマ： 垣根のない温泉

湯来町の中で活躍する様々な団体や温泉同士、また多様な世代が、オール湯来で地域のことを語り合える場をつくり、観光客の増加や雇用の増加を目指す企画案。信仰と湯治場文化の歴史を持った温泉、四季の恵み豊かな土地柄を活かし、地域内外の人が講座や体験活動、婚活イベントなどを通して湯来の魅力を学びあう場を、実行委員会で企画し展開していく。成果は冊子化してPR ツールとする。

#### くらし（文化）グループ

##### テーマ： くらし・文化を創造する

世代を超えた地元愛を広く共有していくことを目指して、「子どもと一緒に作る湯来の未来」を提案。子どもによる湯来を良くする提案を大人たちが聞き語りあう「子どもと大人が湯来の未来を語り合う会」、湯来町を出てい行く高校卒業生に湯来のPRを託す「湯来いいところ広め隊」の任命書の授与、新成人を湯来の郷土料理や子ども神楽でもてなし、地域の魅力を語りあう「湯来町成人を祝う会」の開催の3つのアイデアからなる。

#### くらし（定住促進）グループ

##### テーマ： 湯来ぐらしお試しパック

人口減少と空き家の増加という問題をふまえ、定住促進プラン「湯来ぐらしお試しパック」を提案。定住に至るまでの流れを「きてみんない：空き家をゲストハウスとして提供（2泊3日）」、「なんでもやってみんさい：空き家を活用したシェアハウスに3ヶ月ほど滞在」、「すんでみんない：実際に家を借りて暮らす」の3つのステップで支援する。移住希望者は、家だけでなく田畑も借り、農作業や林業の手伝いをして実際の暮らしを体験できる。

今回の研修は、1 日目の午後から 3 日目の発表が終わるまでが「研修の体験」の時間であった。ここから参加者は「今後コーディネーター研修を開催する」という立場になり、この研修の構成の意図や準備のポイント等について学ぶ時間とした。ここでは、事前準備とフィールドワークの仕込みで重要なポイントについて報告する。

### ■フィールドワークの準備（担当：河野）

- ・ 湯来のあゆみ（まちの資料）、平面図地図 1 万分の 1 の入手
- ・ 地域でヒアリングに協力していただく方の掘り起し、事前ヒアリング（4 か月！）
- ・ 教育の現状を把握するため、武田さんに協力いただき、地域連携の実態に関する学校アンケートを実施
- ・ フィールドワークのゲストアポ（1 グループ 2 名）とルート設定・配車
- ・ 湯来の概論 オリエンテーション、プレゼン資料作成
- ・ 会場、夜の場の調整等

### ■フィールドワークの仕込みで重要なポイント（担当：志賀）

誰に何を聞か、その仕込み方で研修の中身が変わってしまう。各地で実施するときも、ここに労力が必要。時間もかかる。

#### ポイント

#### 👉 仕込みの前に概要把握

図書館で資料を探し、対象地域の基礎情報調査を行う（人口動態、歴史・文化、産業）

#### 👉 ヒアリングのテーマ設定を慎重に！

地域の特徴をあぶり出すためのテーマは何か？ 研修参加人数とテーマ数も考慮

#### 👉 誰にヒアリングする？

多様な視点を担保する。人の組み合わせを意識する。

例：これからの中山間地域に必要なもの、女性と若者

学校教育での地域学習のアンケート調査で情報を補強

#### 👉 フィールドの広さをどうするのか？

持続可能な地域づくりという視点での「地域の範囲」にまだ解答は出ていない。

研修で与えられた時間的制限の問題で、今回は砂谷を外した。水内と上水内でやるうとしたのは、流域での文化圏があると考えたから。



各自で研修企画を考えたのち、3 人で組をつくり、講師も入って「私はこれからどんな人材育成を行っていくのか」の共有を行った。（自由フォーマット）

異なる地域の参加者がペアになり、お互いにコーディネーター研修のフィールドワークを受け入れ合う、というユニークなアイデアも飛び出した。

「研修の目標達成度（％で）」、「その理由」、「研修で感じたこと」をふりかえりシートに書き、グループ内で共有。その後、一番大切だと思ったことを「ひとこと A4 用紙」に書き、全員で輪になって共有して終了した。（担当：河野）



## ■ 参加者の声 <ふりかえりシートより>

- 「地域の課題を知る」の研修は企画・実施する側にとっても相当の時間と労力がかかることを実感した。
- 改めて考えると、問題の掘り下げはできているようでできていなかった。調査・研究・分析は活動の原点だが、地域の団体を見ても、説得力を持って語れないところが多い。ゆえに、助成金申請にも説得力が薄い、グループでじっくり議論する大切さをもう一度確かめた。
- 一緒に ESD に取り組む仲間の存在も近く感じられて力をもらった。今後も情報交流を行い、互いの活動を相乗的に上げていきたい。
- 多くの地域で、地域づくりに取り組んでいる人たちがいることの素晴らしさを感じた。
- ESD コーディネーター講座を企画するうえで、ファシリテーターがとても重要だと感じた。
- 地域の課題を知る・解決するということは、一朝一夕にできることではなく、本当の課題を知るためには、お話を深くきき、その文脈を踏まえて、本質的な部分を見究める努力と時間が必要（大切）だと感じた（気づいた）。
- 課題設定を単に問題の裏返し、言い換えではなく、そこにかかわる（関係する）人たちの立場になってみて想像したり、本当にそうか？ と疑問を持ってみたり、いろいろな可能性をたくさん出していく必要があると思った。課題設定を間違えると（的がはずれていると）提案やかかわる人のやる気が結果に多に影響する。
- 地域コーディネーター（言葉は嫌だけど）としての意識、地域おこし協力隊という存在の見直し、あらためて、地域の課題を知ることの難しさを実感した。
- 中山間地と都市部の共生が大きな課題。中山間地の暮らし、経済がうまくいけば ESD 的には未来へつなげることもできる。湯来も豊田も一緒の問題がある。
- 地域にはそれぞれに事情があり、歴史があり、課題があつて、それを乗り越えて努力していることが本当によく理解できた。それぞれの地区が楽しく輝けるようになればよいと強く感じた。
- 行政は、どうしても事業の費用対効果と成果を求めないといけない。ESD は成果が見えにくいものだが、今日の研修を通して地域の人、全国各地の参加者の人の話を聞いているうちに、ESD の普及啓発にこだわらず、ものごとの本質と課題を感じ取り、解決することを学び活動することも一つの成果だと思った。
- 今回一次産業グループに入り、自分が最も関心ある課題に正面から取り組んでおられる方にお会いし、自分にもできることの再発見をさせてもらった。
- ESD は、誰かと協力して活動することで大きな威力を発する、と改めて思った。今回の研修で私がいたグループのメンバーは、NPO、行政他、仕事は様々だったが、だからこそ多様な意見があり、気づきがあり、よりよい考えにたどりつけた。



## 今後に向けて <主催者ふりかえりより>

3月12日、研修実施にかかわった講師及び事務局メンバーで、湯来研修のふりかえりを行い、今後の研修実施に向けた教訓を洗い出した。(会議は広島と東京をskypeでつないで実施)

### ●時間が短かったことに関して

- 今回の目標設定であれば、本来は3泊4日くらいの時間が必要
- 「目標を課題設定までにしては？」という案もあったが、提案づくりのプロセスの中で課題を掘り下げることがきるので、提案づくりまでは入れる必要がある
- チームビルディングと課題消化の両立が難しかった点については、もっと早い段階でチーム分けをすることで改善できる

### ●課題を深く掘り下げるために

- 地域の方々へのヒアリングに入る前の打ち合わせの時間がもう少し必要
- 2日目の朝の発表後の意見交換については、全体発表よりも地域のことを良く知る志賀さん、河野さんが個別にグループを回りアドバイスする方が効果的であるとの意見もあったが、全体共有を通して、他の入り口（テーマ）からの見え方を共有することも大切であることが確認された
- 中間発表や懇親会の場など、地域の方に入っていただく時間があるとよかった
- 本当に大事なものは、現実に暮らしている人の話を聞き、課題を見出していくところ。研修の主催者が理解し、セットアップできるようになることが必要
- 「見えていない」、「思っているのに話せないことがある」のが地域。そこをどう深めていけるかが大切だが、高いところからアドバイスしても育つものではない。人の顔を見ながら、やりとりしながら進めていく必要がある

### ●その他

- 参加者の対象地域は狭めたほうがいい。(市レベル、県レベル、地域ブロックレベル)
- 実現可能性を考え、プロトタイプ化する必要がある(一人でやるなら10数人、二人なら最大で30人が限度)。必要な予算やスタッフィング、工数を明らかにする
- 本プロジェクトは「ESDコーディネーター」という言葉を使うが、「ESD」を冠するか、「コーディネーター」とするか「コーディネーション力」とするか、などは、実施段階ではケースバイケースとしたほうがよい

ご協力いただいた湯来町の皆さま、ありがとうございました。



参加者、講師、地域の方たちと記念撮影 @湯来交流センター

## ESDコーディネーター・プロジェクト 2012-2014活動報告書

---

発行 2015 年 3 月

認定 NPO 法人「持続可能な開発のための教育の 10 年」推進会議 (ESD-J)

〒116-0013 東京都荒川区西日暮里 5-38-5 日能研ビル 201

TEL : 03-5834-2061

FAX : 03-5834-2062

E-mail : [admin@esd-j.org](mailto:admin@esd-j.org)

URL : <http://www.esd-j.org>

---

この報告書は、2014 年度独立行政法人環境再生保全機構地球環境基金の助成により作成いたしました





